

【本文】

第十八回

簸川原に紀一郎命を隕す  
村長宅に與四郎疵を被る

應仁は二年にして、文明と改元せらる。文明二年、信乃十一歳、母なくなりて三年以来、父に事てます。孝なり。さらぬだに番作は、行歩不自由なるもの、はやく鰥夫となりしより、年々に気力衰へ、齡五十に満ずして、齒は脱、頭白くなりつ。病煩ふ日の多かるに、なほ手習子等を集合ては、いと囁しとて手本をとらせず。さはれ年來衆人の、扶助によりて、親子三人、餓す凍すありけるに、その子孫に教すして、只わが餘命を倉らは、人はたこれをよしといはんや。かゝれば郷に利を遺して、彼等が恩義に報んには、と豫てより思ひしかば、病の間あるをり折に、水旱の準備、荒年の夫食、すべて農家日用の事をのみ述しるして、是を一巻とし、里老等に贈りしかは、兪これを見て嘆賞し、「犬塚生は手迹美事に、武藝をよくすと思ひしに、農業蚕養のうへまでも、人のしらざる所を得たり。この書は不益の賜なり。写し傳へて秘藏せよ。寔に可惜、士を埋木にすることよ」といはざるものはなかりけり。

さる程に暮六は、件の事を傳へ聞て、妬き事いふへうもあらず。はやくその書を閲せんとて、乞求ることしばゝなれ共、里老等はこれを出さず。「けふは某乙が写してをり、写し果るをまたせ給へ」といはるゝにすべもなく、日を歴て人を遣せは、「先より先へ枝貸して、ある所しれず」といふ。暮六ますゝ腹たてゝ、「よしゝその書見ずもありなむ。一村の長うけ給はる程のものが、さばかりの事しらざらんや。番作はわかきより、田畝の中に浮浪すれども、蛭児に劣る腰ぬけなれば、鞦韆とりし事なくて、耕作の利をなでふしるべき。傍いたき事也」と辭を極て誓しかば、里人等はその口を憎みて、卒にかの書を見せざりけり。すべて暮六龜條は、親族他人の

【挿絵】「牝を追ひて紀二郎糠助が屋棟に挑む」「犬塚番作」「しの」「ぬか助」

差別なく、能を妬むの病あり。愛惜ふかく心僻て、とにかく人を讒れども、素より己に見識なれば、人真似をする事もおほかり。

されば番作が犬與四郎は、この年十二になりしかば、里に稀なる老犬なれども、齒並毛の澤衰ず、氣力ますゝ健なれば、一村の群犬、これが為に威服せられて、絶て頭を出し得ず。暮六これをも妬く思ひて、年来とり替牽かえて、幾頭となく犬を養ひしに、みな与四郎に嚙伏られ、或は即死するもあり。或は疵を被りて、廢犬となるもあれば、暮六怨み憤りて、豫て小廝にこゝろを得させ、与四郎を見るときは、主従棒を閉し、左右より打んとするに、与四郎は飛鳥の如く、飛退

き、走り過ぎて、一トたびも打ることなし。逼て打ば卻、咬著んず勢ひなれば、小廝等は竊におそれ、後々は与四郎が出しを見ても主にはつけず。墓六も根柙して、遂に又犬を畜はず。是より詣来る人に對ひて、「犬は門を戌るとて、家毎に養ふ物なれども、今の犬は物だにぐるれば、主を吠て盗見に、尾を掉て狎るゝもあるべし。門戌る役には得たゝずして、家の四邊に糞ちらして、人に踏するのみぞかし。されは畜べきものは猫なり。わきて農家は穀物に、鼠を防ぐを第一とす。猫なくはいかにせん。よりてわれは犬を愛せず、猫を養ふと思ふかし。逸物あらば得させ給へ」と来る人毎に乞しかば、ある人雉毛の肥たる牡猫を、墓六に贈けり。わが物となるときは、愛情ふかき性なれば、墓六はいふもさらなり。亀篠濱路これを愛して、真紅の頸環かけさせて、送代に膝にうち載、或は抱き、或は懐にして、半晌も地には置ず。墓六は猫の名を、何と呼べき、と決めかねつゝ、もの識人に問しかば、その人答て、「むかし一條院のおん猫は、命婦のおとと召れたり。翁丸といふ犬が、件の猫を逐しかば、勅助蒙りし事もあり。この外に猫のよび名を、物に記せしを見ざる也。主の隨意者つけ給へ。故事も相性もいることかは」といはれて墓六竊に歡び走り還て亀篠にいふやう、「猫は犬より貴きものなり。昔一條院のおん時には、猫に叙爵給はりて、命婦のおとと召れしとぞ。亦りとして平人は、主尚爵位なきものなれば、又命婦とは呼がたし。わが猫は雉子毛也。番作が大は四足白なり。四白なる故に、与四郎とよぶとかいへば、わが猫は雉子なる故に、紀二郎と名づくべし。けふより奴婢にもこゝろ得させて、この名を呼せ給へ」といへば、亀篠聞て、笑坪に入り、「呼めでた、佳名也。濱路も如右こゝろ得よ。紀二郎は何処にをる。紀二郎々々」と呼立て、ますゝ龍愛する程に、比は如月のすゑなれば、牝恋盛る友猫のよび声に浮されて、彼紀二郎は尻もおちぬす、屋棟より屋棟を傳ひあるきて、或は群猫と挑み嘯りて、亭主が長竿に追走かされ、或は餓て常には疎き、他の宿所に夜をあかし、三日四日がほど家にも還らず。一日件の紀二郎は、番作が背門近き、莊客糠助が廁の屋棟に、友猫と挑てをり。その声遠く聞えしかば、亀篠耳を側立て、忙しく小廝を呼び立、「南向に声するは、紀二郎にやあらんずらん。とく出て見よ」といへば、小廝等はこゝろ得て、一人はやがて番作が前裁のかたに赴き、一人は糠助が宿所のかたへ、声をしるべにゆく程に、彼紀二郎は友猫に、いたく噬れて堪ざりけん、滾々と輾びつゝ、廁のほとりへ撲地と落。時に番作が犬與四郎は、匍伏て背門にをり。今紀二郎が落るを見て、身を起し走り來て、噬みさんと近づけは、紀二郎は驚きながら、爪を張りつゝと四郎が、鼻柱を撞傷ん、と前足を閉すを、物ともせず飛かゝりて、左の耳を引銜、一揮ふれば紀二郎は、耳根より駁断られ、命限りと逃走れば、与四郎はなほ脱さじ、と霧直に追蒐たり。

墓六が小廝等は、三丈許あなたより、この好景を見て、驚き騒ぎ、吐嗟と叫びて、与四郎が趾を慕ひて喘々、何処までも追ひ程に、城塚廟のほとり、一條の小川あり。ここに至て紀二郎は、途窮りて慌忙き、引かへして逃んとするに、与四郎はやく跳がりて、猫の項を合啞とくはえて、只一當にぞ囃殺す。當下小廝等近づきて、「彼よ〜」と叫ぶのみ、手に一條の棒を拿ねば、小石を把て打かけ〜、走り著んとするを見て、與四郎はやくも途を横きり、何地とはなく矢にけり。緯の騒動大かたならねば、彼糠助も背より來つ。墓六は縁由を、聞くとそがまゝ棒を引提額蔵といふ小廝の、年十二になるを將て後走に來つれども、紀二郎ははち囃殺され、猫の仇なる大はをらず。緯の趣を尋るに、「番作が大與四郎が所為也」と小廝等詳に告しかば、墓六は潜然と、圓なる目に涙を流して、小廝が救得ざるを憾み、且怒り且罵て、棒もて地上をうち敵き、「いかなれば彼廢人、かくまでわれを侮れる。彼奴が姉はわが妻なり。われは嫡家を続のみならず、便是村長也。彼奴が不礼をいへばさらなり。そが養大まで主に做ふて、わが愛猫を殺害し、飽までわれを辱しむ。もし眼前に犬を殺して、紀二郎が怨を雪めずは、この熱腸を冷がたし。汝等二人は糠助もろとも、番作が宿所に赴き、彼畜生を牽すり來れ。その口状は箇様々々」と、巨細に説せば、先に來りし兩個の小廝は、こころ得果て、遽しく、糠助を誘引つゝ、番作許赴けば、墓六は額蔵に、猫の亡骸をかき抱せ、なほ諍々と途すがら、罵止まで還りけり。今このわたりに掛れる橋を、簸川の猫侯橋といふとぞ。紀二郎が故事に因なるべし。

却説墓六が兩個の小廝は、糠助とくもに、大塚が宿所に赴き、番作に對面して、紀三猫が最期の顛末、與四郎犬が残害の為体を演説し、「主人墓六この年來、影の犬を畜といへども、貴所の犬に傷られ、或は即死しつるものあり。しかれども墓六は、なほ穩便の義を存じて、一トたびも恨を述べ、送に畜入あればこそ、争ひの端とはなれ、寔に能なきことなり、と思ひかへして犬を畜す。婦幼の愛る隨に、ちかき比より猫を養ひ、これ又貴所の犬の為に、一朝に失はる。友犬の戦ふは、いつれをわろしと定めがたし。猫は犬と争はず、見ればおそれて避るもの也。しかるをなほこれを追ひ、これを殺すは犬に罪あり。件の犬を給はりて、猫の仇を報ふべし。緯の起は糠助男が宿所のほとりにての事なれば、證人として將て參れり。吾侪に犬を遞与給へ。主人の口状かくの如し」と辭齊しく述訖れば、糠助は我身ひとり、困じ果たるおもゝちにて、番作につち對ひ、「とかく村には事なかれ、と生平にも人のいふことながら、怪有なることにかゝつらひて、心くるしく思ふかし。穩便の返答なくは、吾侪もほと〜難義に及ん。よろしき挨拶聞まほし」といふに番作うち笑ひ、「かばかりの事いかにして、和殿の難義に及ぶべき。使者の口状その意を得ず。いはるゝ

所理あるに似たれど、そは人倫のうへにして、畜生は五常をしらす。絶て法度を辨へず。弱きは強きに征せられ、小は大に服せらる。されば猫は鼠を食へど、犬には絶て勝ことなし。犬は猫に傷れども、豺狼と戦ふことかなはず。みな是力の足ざる所、形の小大によるもの也。もし犬を猫の仇とせば、猫を鼠の仇とせん。そを仇として死を贖ふは、人倫のうへにあり。畜生の為に律をたづね、報讐死刑の制度あるよしは、わがしらざる所也。且猫は畜れて席上にあり。今そのところを失ふて、漫に地上を奔走し、犬の為に命を隕すは、みづから死地に入るにあらずや。又犬は畜れて地上にあり。亦その所を失ひて、席上に起居せば、人見て是を許さんや。わが犬足下の宅地に赴き、座席に到ることあらは、打殺さるゝとも怨なし。猫の死を贖ふ為には、つやゝ犬を遞与がたし。たち帰てこれらのよしを、よろしく長に傳へ給へ。使大義」と鷹揚に、辨舌水の流るゝ如く理り逼たる返答に、両箇の小廝は唯々と猫に袋を被せしごとく、尻を叩くし、頭を低、逡巡して退けは、糠助は陪みながら、番作に辞し別れ、小廝とゞもに退出けり。

さる程に暮六が宿所には、龜篠瀆路等、紀二郎猫が、死骸を抱きて泣叫び、犬を罵り、番作を怨つゝ時移るまで、「今もや仇を牽もて来る坎」と小廝が首つれをまつ程に、両箇の使は糠助もろ共、手を空して帰り來つ、番作が返答を、おちもなく告しかは、龜篠聞て怒に得堪ず、「姉を姉とも思はざる、番作が偏僻は、今にはじめぬことなれども、勸解らるゝ口をもちながら、嘲り誇る非法の返答、この度は堪がたし。汝等再び彼処に赴き、有無をいはせずその大に、荒縄かけて牽もて來よ。あな手ぬるし」と敦圍は、暮六急に推禁め、「番作は足蹙たれども、武藝において侮りがたし。われ一郷の長として、只一頭の猫ゆゑに、この争ひを、惹出し、左右方傷く事あらは、理ありといふとも越度とせられん。公の沙汰心もとなし。こは此まんに聞とも、恥を雪る術ありなん。渠既にみづからいはずや。彼犬もしわが宿所に入らば、打殺すとも恨なし、と口走らせしぞ幸ひなる。謀りて犬を敷地へ誘引ひ、竹鎗をもて刺留なん。兪竹鎗の準備をせよ」とほりかに説示せは、龜篠やうやくおもひかへしつ、小廝等を、と見かう見て、「糠助は汝達と、共に來つると思ひしが、竹鎗の事聞ずや」と問ば小廝は後方を見かへり、「今までは処に候ひし、還るをば見す候き」といふに龜篠眉うち顰め、「彼糠助は番作が、背門のこなたに住居すなれば、固より親きものとぞ聞く。わが良人の謀、彼が口より洩もやせん。振りにけり」と舌うち鳴して、後悔すれば、暮六は、心つきて小膝を拍、「嗚呼 悞り悞ぬ。謀は密なるを、よしとすといふものを、わるき奴に聞れたり。遠くはゆかじ、追留よ。童は足いと早きもの也。額藏ゆきね」といそがせは、應もあへず外面へ、裳を褰て走去けり。

尔るにこの額蔵は、年に似けなく才長て、その才をあらはさず。志気あるものなれば、月ころ  
主の物妬を、傍いたく思ふ物から、陽にはその意に悖はず。「この日も件の計較を、いと嗚呼なり、  
と心には、思はざるにあらねども、いはるんまんに違て、走り出しが、遠くはゆかず、且し  
てかへり來つ。」途にて追つき候はねば、彼宿所までいゆきて見せ、糠助ぬしは宿へも還らず。  
彼人は去年の秋の、眞の債ありとか聞り。いかでか村長を敵にして、自滅を招き候へき。捨おかし  
給ふとも、口利ことは候はじ、と心つき候へは、先々までは察候はず。なほ察ぬへつもや」と眞し  
やかにこしらゆれば、幕六聞てうち點頭「現汝がいふごとく、渠は債あるもの也。さればその身  
を愛せず、わが為わるき事はえいはじ。よしやいふとも洩すとも、彼大には四足あり。主の番作  
には似るべつもあらず。雲時はこれを撃きおくとも、日を歴なば出あるかん。そのとき敷地へ呼び  
入れて、刺殺さんこと易かるべし。竹鎗の準備懶るな」とその手配を傳へさせ、與四郎犬がい  
來るを、これより日に、俟なるべし。

却説莊客糠助は、幕六が計校を、番作にしらせん、と思へば別を告すして、遽しく走り出、大塚  
が宿所へいゆきて、幕六夫婦がいひつることを、潜やかに報知せ、「斯いへば仇なく、中言するに  
似たれども、某村長には債あり、彼人わるかれとて告るにあらず。縦義絶の親類ともいへ、長  
の内室はおん身の姉也。畜生の事によりて、ます、怨を結んこと、好とは絶ていひがたし。か  
れば彼與四郎を、近郷へ遣し給へ。大だにこゝにをらずならは、人の怨も自然と鮮なん。この議は  
いかに」と密語は、番作聞て沈吟じ、「今にはじめぬ和殿が親切、歡びこれにますことなし。然なが  
ら、幕六鬮の智囊を拂て、謀をめぐらすとも、われ露ばかりもこれをおそれず。せんすべは又  
いくらもあるべし。只恨らくはわが足蹙て、近來ます、多病也。理ありといふとも争ひを好ま  
ず。且畜生は智ありて智なし。安危をしらざるものなれば、欺れて彼処におもむき、打殺されな  
ばわが羞なり。和殿よろしく計ひて、犬を遠離給はるべし」とやうやくに諾ひしかは、糠助大に  
歡びて、信乃にも縁由を告、與四郎に物夥食して、その夜瀧の川へ牽もてゆき、彼処の寺へ関つ  
るに、犬は糠助より先にかへりて、はや番作が門にをり。「こは途の近き故なり。河を涉さば得か  
へらじ」とて、次の日は、東南のかたへ牽出し、宮戸川をうちわたして、牛嶋に棄たるに、其処に  
もをらでかへり來つ。かくの如くすること、尙三度、五六日を費せども、勞してその功なかりしか  
は、糠助は呆れ果て、遂に又彼犬を棄す。當下信乃思ふやう、與四郎は主を慕ふて、身に禍の及  
ぶをしらず。この犬果して殺されなば、父の怒り、甚しく、いかなる事もやいで來な。いとこゝ  
る憂き事なりかし。願ふは與四郎も殺されず、わが伯母夫婦の恨も散て、無異におさまる謀、な

からずやは、としのび〜に、肺肝を推きつゝ、僅に一の計を生し、父に告てはその事成らじ。  
糠助男に相譚はや、と思へばやがて外に出て、件のをとを索るに、畑をかへして草野にをり。側  
に耕すものなければ、折こそよけれ、と彼処に赴き、云云にせばやと思ふ、意中の機密を説示し、  
「所詮彼与四郎を、伯母夫の宅地近く牽もてゆき、犬に對て罵りいはん。この畜生よしもなく、長  
が愛する猫を殺して、親族怨を重るの禍を惹出せり。よりては〜棄たれ共、なほこりすまに  
かへり来て、みづから死地に入るをしらす。今はしもせんすべなし。汝を殺してわが伯母夫婦の、  
怨を解んと思ふのみ。賞期せよ、と罵りて、杖をあげて犬を打は、犬は必逃走らん。逃るを追ふ  
て打走らし、趾を慕ふて宿所にかへり、且く犬を撃き置は、わが伯母夫婦、その声を聞、その好景  
を見て必おもはん。番作その子に犬を打して、猫を殺せる罪を謝せり、と了解せば怨も散て、犬  
を殺すの念を絶なん。与四郎が必死を救はゞ、わが父に恥あることなく、親族怨を重るの歎きな  
し。この事何とか思ひ給ふ」と問は糠助一議に及ばず、「吁賢哉々々、和子は僅に十一才、その  
智はむかしの楠公にひとし。且その謀る所親の為、伯母を思ふの孝也義也。われも共侶にゆくべ  
きに、とく〜」といそがせば、信乃は既に翼を得て、こころます〜勇みあり。遽しく走りか  
へりて、わが門にをる與四郎を、誘引立て糠助も共、曇六が門に將てゆきつ。謀りしごとく声を  
ふり立、云云と罵責て、棒を揚杖を採て、與四郎を毘と打。うたれて犬はこころを得ず、生平に  
はあらで糠助さへ、われを打こと大かたならねは、驚き喉て途を失ひ、舊の路へは逃もかへらで  
曇六が宅地を遶りて、背門のかたへそ走りける。信乃糠助はこれを見て、あな便なし。そなたに  
あらず、こなたへ逃よ、といはぬばかりに、途をひらきて左右にわかれ、杖を揚て追蒐れば、犬  
はいよ〜狼狽さわきて、走り脱んとしつれ共、この処は瓢のごとく、口一方にして、前面に路  
なし。已ことを得ず曇六が、背門より裡面へ走り入り、勢に乗しつゝ、左辺なる子舎へ、身を跳  
して飛込たり。すはや、と騒ぐ曇六が小廝等は手配して、後門も芥門も毘と閉、「是首よ、彼首よ」  
と散動声、聾しきまで聞えしかば、糠助は喉惑て、信乃が袂を引とゞめ、「毛を吹疵を求たり。も  
し虚々とこゝにをらは、忽地不虞の危殃あらん。とく逃給へ」といひもめへず、拿たる棒を隠さん  
とて、懐へ挿入れつゝ、走り避んとする程に、腰につかへ、脚にからまり、鞞丸さへに推痛めて、  
俯に跌倒れ、吐嗟と叫て、棒を繰り捨、やうやくに身を起せば、膝破れ衄血流るゝを、見かへる  
に違あらず、面を蹴め、膝を拵、足を引つゝ逃亡けり。

かくても信乃は退かず、よしなき所行をしつるかな、と百遍悔、千遍悔ども、又せんすべはなき  
ものから、隙もあらば與四郎を、救ひとらんと思ひしかは、彼此に立違りて、犬の

【挿絵】「怨をかへして暮六小ものを勞ふ」「庄官ひき六」「かめさ」「小ものがく蔵」

出るを待といへども、門の扉を鎖されたれば、絶て出へき路もなし。犬はいと苦しげに、吠鳴く声聞えにければ、「嗚呼与四郎は殺されなん。いとをしき事してけり」とひとりこちつゝ杖に携て、なほ背門のこなたにをり。かくてあるべきにあらざれば、今は救ふによしなし、と思ひ絶て宿所に還り、「已ことを得ず云」と匿まず父に告しかば、番作怒れる気色なく、つくゝと聞て嘆息し、「汝総角たりといへども、人にましたる才学あり。その智によつて不覚をとりしは、人をしらざるの失也。わが姉はこゝろ儼り。暮六は能を媚む小人なり。汝謀りて犬を打とも、渠豆それに嘍りて、憤を鮮ものならんや。しかれどもこなたより、犬を追入れて撃せしは、不覚に似て不覚にあらず。彼より犬を呼入れられて、殺されなはいかばかり、われは悔しく思はなん。与四郎が死は不便なれども、惜て今さら詮なきことなり。なほ風声を聴定めよ」といふ言葉いまだ訖らず、件の犬は血に塗れ、起つ轉つ庭門より、跟々と走りかへりて、そがまゝ撲地と臥しかば、信乃ははやくも見かへりて、「あな痛まし、與四郎が還り候は」といひあへず、走りをりて斃れば、番作は遽しく、柱に携りて、身を起し、縁類に出て、とくと見て、「斯鎗痕を受ながら、其処にて斃れず還りしは、老ても逸物なれば也。雖然生がたし、日陰へ牽入れ得させよ」といふに信乃はこゝろ得て縁類の下に藁孤布て、痕負る犬を扶臥させ、「阿、與四郎よ、苦しき坎。汝に危殃あらせじとて、われ如此々々に謀しかど、汝は脱路をとり失ひ、怨る人の背門より入て、かくは命を隕すめり。それ將吾儕の怨なり。よしなかりき」と身を責て、水を口に沃ぎ入れ、薬を痰に揮かけて、こゝろを竭して勤れども、又生べうは見えざりけり。

さる程に暮六は、憎しと思ふ与四郎が、はからず背門より走り入て、子舎へ登しかば、やがて小廝に門戸を鎖せ、主従すべて五六人、準備の竹鎗、挟み、追ひ出し、駈立て、刺留んとしつれ共、件の犬は足はやくて、鎗下を潜り脱路を求めて出んとするに、前後の門を鎖たれば、進退既に究りて、数个所の疵を受ながら、吼り狂ひて伏も斃れず、板屏の下突破りて、外面へ出しかば、「彼逆すな」と暮六主従、門扉を開きて追蒐しが、そのみはとて引かへす。

當下暮六意氣揚々と、小廝等を勞ひて、「けふの働き抜群也。恨くは大を刺留す、さはれ深痕を戻せしかば、必途にて斃れなん。さはあらずや」と誇貌に、鎗を庇に立かけて、縁類に尻をかくれば、龜蓀は背より、扇をひらきてあぶぎ立、「けふといふけふ紀二郎が、鬻をやうやく復したり。思ひしにます彼畜生は、猛くもこゝろに死ざりし。汝達は怪我せずや」と問は小廝等袒を收、「いな何ともつかまつらず。宣ふ如く猛き犬にて、吾們が手に及ざりしを、主の光りて、とやらかうや

ら、痛痕を肩し候」といふに幕六さもこそ、と鼻高やかにをこめかし、馳て裡面にぞ入にける。そが中に額蔵のみ、小廝等と共侶に、立さわぐのみ、犬をば追はず、畜生に傷けしとて、妻子に誇る主の兒を、つくく〜と目送りて、冷笑ひつゝ退ぎぬ。

且して幕六は、龜篠を二室に招ぎ、蒸襖引立させて、額を合し、声を潜め、「今小廝等がいふを聞くに、番作が犬がゆくりなく、背門より走り入りつるは、信乃が追入れたればなり。そのとき件の小孩児が、犬を責て云云、と罵れるを聞きしもあり。そは信乃一人が所為ならで、糠助も共侶に、彼犬を打しといへば、その故なくはあるべからず。今そのころを猜するに、番作陽には剛氣を示せど、みづから争ひがたきをしりて、さてそその子に分付て、犬をこなたへ送りしならん。この勢ひを脱すして、うまく謀らは招すして、番作に帰伏させ、彼村雨の一刀も、遂にわが手に入ることあるべし。われ大塚の遺蹟たれ共、家譜も傳へず、舊記もなし。匠作ぬしの長女たる、そなたの夫といふのみ也。尔るに鎌倉の成氏朝臣は、顕定、定正の両管領と、中わるくなり給ひて、曩に鎌倉を追落され、許我の城に籠せ給ひて、合戦今に絶る隙なし。これによりて當所の陣代、大石氏も早晚に、鎌倉へ出仕して、両管領に従給へり。われは成氏のおん兄、春王安王の傳たりし、大塚氏の後なれば、両管領へ大かたならぬ、志をあらはさずは、始終の安危心もとなし。彼村雨の一刀を、鎌倉へ献らは、わが野心なきよしを、しらせ奉るのみならず、恩賞拔群なるべし、と思ひにければこの年來、心を竭し術をかえ、件の刀を謀れども、番作もその機をしりてや、絶てわが家に來たらす。宝刀をふかく蔵おき、人にはこれを見せざれば、いかにともせんすべなく、今にわが宿望を得遂す。裕といひ恰といひ、番作をだに帰降させ、件の宝刀を獲たらんには、家の繁昌疑ひなし。然とても番作は、をさく〜智勇に長たるものなり。もし糠助を使ふにあらずは、輒くは謀りかたけん。渠小孩児と共侶に、犬をこなたへ追入れしは、究竟の事ぞかし。おん身竊に糠助を召よせて、箇様々々にこしらへ給へ。番作智勇ありといふとも、進退其処に窮らば、いかでか子ゆゑに迷ざるべき。緯十分に成就せん。その謀は如此々々」と耳を引よせて密語はわが母ならず。志さへあはずとも、百歩の間をりをりながら、絶て一たび訪も來ず、姉を譏りし、罰をあてゝ、物おもはせんはこのときなり。さは「とて小廝を呼よせて、糠助召よて遣しけり。

畢竟龜篠、糠助に、いかなる事を説出せる。そは又次の巻にて鮮なん。